

松本城と城下町

松本城とその城下町の建設は、1590 年、石川数正（1592 年没）がこの地の領主に任命されたときに始まった。すでにこの地には小規模な城郭が存在していたが、数正は天守閣を囲む堀と複数の櫓を計画的に築き始めた。数正の死後、息子の石川康長（1554-1643²）が 1594 年に大天守、乾小天守、渡櫓などを完成させた。

16 世紀後半になると、武将たちは城を山の上に築くのではなく、丘陵や平地に築くようになった。山城は防御しやすいが、兵糧の確保が難しい。低地の城は、周囲の農家や工房から兵糧や武具を調達することができる。

松本城のような平地の城には自然の防壁がないため、同心円状の堀で囲まれていた。何世紀もの間、松本には 3 重の堀があった。内堀は天守閣や土蔵、大名が住む本丸御殿などがある本丸を囲んでいた。内堀の外側には二の丸があり、二の丸御殿をはじめとする建物が狭い凹字の曲輪に配置されていた。二の丸は外堀で囲まれており、その外には三の丸がある。三の丸には大名の上級家臣が住み、39 ヘクタールの敷地全体を囲む最外堀と土塁によって、城外の町とは隔絶された場所にあった。

城下町の周辺は、低湿地や農地が広がり、農民が住んでいた。城下町の各区画の移動は、結接点に設けられた木戸によって、厳しく制限されていた。